



KWANSEI
GAKUIN
UNIVERSITY

Supported by

日本
財団
THE NIPPON
FOUNDATION

手話言語研究センター講話会

2017年2月11日開催

関西学院大学手話言語研究センター

目次

開会の辞	2
山本 雅代（関西学院大学国際学部教授／手話言語研究センター長）	
第一部『LISTEN リッスン』上映と対談	3
講師 牧原 依里（『LISTEN リッスン』共同監督）	
小石 かつら（京都大学白眉センター特定助教）	
司会 オストハイダ テーヤ（関西学院大学法学部教授／手話言語研究センター研究員）	
第二部「人は言語をどう習得するか」	16
講師 岡 典栄（学校法人明晴学園国際部長）	
棚田 茂（埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園主幹教諭）	
司会 森本 郁代（関西学院大学法学部教授／手話言語研究センター副長）	
第三部「手話言語に楽しく触れ合ってみましょう」	34
講師 森田 明（学校法人明晴学園教諭）	
司会 松岡 克尚（関西学院大学人間福祉学部教授／手話言語研究センター研究員）	
閉会の辞	37
松岡 克尚（関西学院大学人間福祉学部教授／手話言語研究センター研究員）	
登壇者紹介	40

開会の辞

山本 雅代（関西学院大学国際学部教授／手話言語研究センター長）

○山本 おはようございます。

関西学院大学の山本と申します。

本日は、皆様せっかくのお休みの日にわざわざこちらまで足を運んでいただきましてありがとうございます。本日は雪の関係で、皆様来られなくなったら困ったなと思っていたのですが、幸いにも非常に良い天気で、皆様にお越しいただき本当に良かったと思います。

センターができたのは一昨年ですが、本格的に活動を開始したのが昨年からです。ですから、私たちもまだ手探りで色んなことを考えてこういう催しをしております。ただ、まだまだ十分でないところが沢山あると思います。本日も最後にアンケートを皆様にお渡しいたしますので、皆様御要望を沢山上げていただきましたらありがたく思います。

それからもう一つ、御紹介したいのですが、関西はこういう活動を結構活発にするようになっておりまして、もちろん東京でも沢山やっていますが、関西の場合、当センターの他に、少し離れたところに活発に手話言語の研究をされている国立民族学博物館がございます。様々な催し物もされていますので、当センターの催し物とあわせて国立民族学博物館の催し物にもぜひ御参加いただくと、色々な方面から手話言語に関する知識として身につくのではないかなと思いますので、大いに御利用ください。

では、本日はこれから三部、それぞれの部で非常に貴重なお話しや、貴重な活動がございますので、十分に堪能してお帰りいただけたらなと思います。本日はわざわざお越しいただきありがとうございました。

では、早速始めさせていただきます。

【第一部】『LISTEN リッスン』上映と対談

講師：牧原 依里氏（『LISTEN リッスン』共同監督）

小石 かつら氏（京都大学白眉センター特定助教）

司会：オストハイダ テーヤ（関西学院大学法学部教授／手話言語研究センター研究員）

○オストハイダ 本日の司会を務めさせていただきます関西学院大学のオストハイダと申します。よろしくお願いいたします。

早速映画の上映会に移らせていただきたいと思います。この映画は「LISTEN リッスン」という、ろう者の音楽を視覚的に表現した映画です。昨年から全国で順次公開されております。本日は共同監督でいらっしゃる牧原依里監督にお越しいただいております。大変光栄に思います。舞踏家の雫境さんと共同で監督をされた映画です。せっかく牧原監督にお越しいただいておりますので、映画上映前に一言メッセージをいただければと思います。

牧原監督は会社員をされながら、聾の鳥プロダクションの代表を務めるなど、映画分野で様々な御活躍をされていらっしゃいます。また、東京の映画祭のディレクターもされています。牧原監督よろしくお願いいたします。

○牧原 御紹介ありがとうございます。改めまして、牧原依里と申します。本日は、皆様御来場いただきまして、誠にありがとうございます。

もう一人、先程御紹介がありました共同監督の雫境ですが、本日はあいにく都合が合わず、私1人で大阪に来させていただきました。

ただいまから上映させていただく映画ですが、皆様をお願いしたいことは、あまり深く考え込まず、感覚的に、視覚的に見てお楽しみいただいて、後ほど対談の時にじっくりお話を聞いていただければ幸いに存じます。どうぞよろしくお願いいたします。

○オストハイダ どうもありがとうございました。

映画の上映に関して注意事項があります。

この映画は無音の映画です。映画館や、この会場もそうですが、静かな時でも、空調の音や隣の方の呼吸など、色々な音がします。それを音の概念をすでに持つ聴者が、完全に遮断することはできませんが、できれば耳栓をして音を遮断して映画をご覧になっていただきたいと思います。こちらは強制ではありません。

では、始めます。どうぞご覧ください。

(映画上映)

○オストハイダ 音に縛られることなく、この映画を見て本当に視野が広がりました。

どうもありがとうございました。それでは、対談に移らせていただきたいと思います。

お二人にお越しいただいております。先程も紹介いたしました、「LISTEN リッスン」の監督の牧原依里さんです。よろしくお願いします。

もう一人の方は、音楽学の専門家、京都大学白眉センターの先生でいらっしゃる小石かつら先生です。よろしくお願いします。

小石先生は、京都市立芸術大学大学院でピアノを学ばれ、その後、ライブツィヒ大学、ベルリン工科大学と大阪大学大学院の研究科で音楽学を学ばれました。専門は19世紀の西洋音楽史です。翻訳や著書の出版もされており、私がドイツから来ていることもあり、先生の書かれた「ドイツ文化史への招待」はぜひ読ませていただきたいと思います。

最後に、質疑応答の時間も設けたいと思います。

それでは、対談をはじめさせていただきます。よろしくお願いいたします。

○小石 御紹介いただきありがとうございます。小石かつらと申します。

本日、ここに呼んでいただいたのは、たぶん音楽を専門に研究しているからだと思います。今回は、音楽を主題にした映画だったのですが、タイトルが、「音楽」というタイトルでもなく、「LISTEN リッスン」、聞くというタイトルだったので、それが物凄く大きな意味があるのだろうかと思い、そういうところから聞いてみたいと思うのですが、よろしいでしょうか。

○牧原 改めまして、皆様、映画を御鑑賞いただきまして、誠にありがとうございます。

タイトルについてですが、実はもう一人の共同監督も私も、タイトルは要らないという考えでした。ですが、もちろん映画をつくる以上タイトルが必要ですので、二人で色々考えました。タイトルは要らないと思った理由は、タイトルをつけてしまうと、その言葉が持つイメージや概念に引っ張られてしまうからです。そういう意味で日本語にすると非常に難しいところがあると思い、英語だともう少し幅広い意味でとらえてもらえるのではないかと思いました。そして「LISTEN」がいいのではないかという案が出てきました。非常にシンプルではありますが、「心で聞く」という意味や、ろう者ならではのアイロニー的な意味合いも含まれているのではないかなと。「LIS

T E N」という言葉一つとっても色々な見方やイメージが人によってあると思ったので、そういう意味でこのタイトルに決めました。

○小石 特に今、「英語で」というのをお聞きして、本当になるほどと思いました。というのも、音楽を専門にしていると、「聞く」という言葉を言ったり、文字で書いたりすることが凄く多いのですが、それを普通に「聞く」という漢字を使うのか、それとも「聴く」という漢字を使うのか、それともひらがなで「きく」と書くのか、そのひとつの言葉だけでも、何をその言葉に込めるのか、何を読者に感じてほしいのかというのが問題になってきます。それを英語でlistenという言葉が使われた意味を今お聞きして、なるほど、それもありだなと思って、凄く面白いというのも変なのですが、私が今まで「聞く」、「聴く」、「きく」という3つを使っていた中に「listen」を入れるのもいいなと思いました。

○牧原 ありがとうございます。テーマを決めるまで、本当に色々と議論しました。ロゴにしようかという案もありました。文字に拘束される必要もありませんし、あえて文字でテーマをつけなくても、絵などでテーマをつけられるのではないかということも議論の中にはあったのですが、絵だと逆に宣伝ができないということになり、最終的に「L I S T E N リッスン」としました。

○小石 聞きたいことが沢山あるので、このまま続けさせていただきます。「聞く」という文字や言葉で想像しているものがあって、それを的確かつふんわりと広がりを持って伝えたいということなのだと思います。そして、同じく映画のテーマにされている「音楽」という言葉も、そこから想像するもの、理解するもの、現象というものが、恐らく人それぞれ違うからこそ映画をつくられたのだと思います。多分その音楽というのが「聞こえない」音楽、「聞こえる」音楽、というふうに、音楽の前に色々と説明をつけて言ったりするんですけども、それ以前にも音楽というものの考え方そのものがみんな違うからこそ音楽をテーマにしてみたいという思いがあったと思います。そのあたりお話をお願いします。

○牧原 そうですね、おっしゃるとおりです。私、幼い頃から不思議に思っていたのですが、聴者の世界では音楽があって、私たちろう者の世界には音楽がないと一般的には思われていますよね。その辺の疑問からこの映画制作が始まりまして、聞こえる人たちが持っている音楽に対して、もちろん私自身どういうものなのか興味はありました。ただ、音が聞けないので、興味は持ちつつも聞くことはできないわけです。そして、

また民族によっては文字を持たないけれども、その地域ならではの音楽が非常に普及しているということがあります。そのあたりを民族学の小池先生が研究されており、小池先生は「文字を持たない民族はあるが音楽がない民族はない」とおっしゃられています。そうすると、私たちろう者は言語は持っているが歌や音楽を持たないのか、ということはずっと疑問に思ってきました。というのは、私自身両親もろう者で手話のある家庭で育ちましたが、手話を見ていて、音楽ではないのですが何か心地良かったり惹かれたりする気持ちはずっと幼いころから持ち続けておりました。それなのに本当にろう者には音楽がないのか、音楽を楽しめないのかという葛藤に似たようなものをずっと持ち続けていました。

ろうの友達に「ろう者には音楽がないのか？」と聞いてみても、何か口をつぐんでしまうような感じがありました。逆に「それは振動ということ？」と聞いてくる人もいました。そこからなんですよ。音楽を振動で感じることはできるというろう者もいますし、また手で表現したり、リズムなどで音楽を表現する方法もあるということで、色々な音楽の定義をろう者の間でも議論しておりましたが、非常に難しいなと思っていました。

そもそも私たちろう者にとって一番心地よい方法は何なのか。もしかするとそれは非言語的要素であって、それが音楽と結びつくのではないかと思いました。そのきっかけというのが、大学のときに出会った手話ポエムです。手話ポエムというのは、音楽ではなく詩です。音声言語もそうですが、手話言語にも音韻があって、手話ポエムは韻を踏んで表現されます。この映画にも御出演くださった佐沢さんが手話ポエムをされているのを大学の時にたまたま拝見し、非常に鳥肌が立つほど衝撃を受けました。その非言語的な部分、例えば間の取り方や言葉の紡ぎ方にすごく感動しまして、それが実際聴者が楽しんでいる音楽と接点があるのではないか、これは今後分析をしていくべきだと思い始めたのがそもそものきっかけです。実際にこれがろう者の音楽だと決めつけるわけではもちろんありませんし、観て下さったみなさんにお聞きして考えていただきたい部分であって、正解はないのだと思います。

○小石 私はよく、音楽学や西洋音楽史の授業で学生に、「あなたにとって音楽って何ですか」という質問をします。すると、みんな考え込んでしまうのですよね。もちろん今お話があったように、音楽というのは聞くものだというのが大前提になるのですが、それでもなお聞くものだと、聞いて知っていて、聴者として音楽を知っていてもなお、

「あなたにとって音楽って何ですか」と言うと、みんな固まってしまう。私にとって音楽とは何だ、こういうものだと言えられる人は今のところ何年も出会ったことがありません。みんなそこで、自分にとって音楽とは何だろうと考えます。どんなふうに感じるものなのか、それとも聞いているものなのか、それとも体を動かしたくなるようなものなのかということを考えてしまうのです。ですので、前提が違って、その捉え方は同じなのだと今思いました。

○牧原 今のお話を聞いて少し思ったことがあるのですが、この映画を見た方から、「これは音楽じゃなくて『視楽』なのではないか」と言われることが結構あります。結局のところ、ろう者は「音楽」という言葉の表面にこだわってしまっているのですよね。音楽はあくまでも「音を聞いて楽しむもの」だ、そしてこの映画は「視るもの」だと。そして「楽」という「楽しい」部分は共通していると。つまり、言葉の持つ表面しか見ていないわけです。聞く音楽と見る音楽は異なるのだから、これは「音楽」ではなく「視楽」とした方が良いのではないかと、漢字の持つ表面の意味だけを見て言われるのです。例えば障害という「害」の表記を漢字にするか、「がい」とひらがなにするといった話がありますが、それは表面だけの問題であって、本質の部分にまで届いていないと思います。この映画もそのような見方をされている部分もあるのかなと思いました。聴者だけではなく、ろう者にも混乱を招いているのかと。つまり、そもそもろう者には「音楽」という言葉に対する予備知識がないというか、音楽イコール聞くものという一般的な概念を持っているということです。しかし、実際振動を感じたり、リズムを感じたり、自分が体を動かしたくなったりというような楽しみ方も音楽ではあるわけです。古い西洋音楽では実際五線譜を使わず音楽を楽しんでいる国や地域が沢山あるわけですね。五線譜を使う地域からすると、「これが音楽なのか」と思えるようなものでも、彼らにとっては音楽なわけです。例えばアイヌ音楽では、ヨーロッパや我々日本人から見ると、これは音楽とは言わないというような見方もあるかもしれないですが、彼らにとっては立派な音楽なのです。音楽という概念もそれぞれ国や地域によって異なるわけですね。非常に深いと思います。

でもこの映画をご覧になった多くのろう者は、これは音楽ではなく、「視楽学」だとおっしゃいます。そもそも「音楽」とは何なのか。非常に難しい問題です。ろう者は音楽について学んだり触れたりする機会が非常に乏しいです。ですので、音楽と言えれば、「聴者が音を聞いて楽しむこと」ということだけにとらわれてはいけないという

ことを知る必要がありますし、また世界各国の色々な音楽や、踊りなど、様々な教養を得る機会が必要だと思います。そうすることで、ろう者もそれを元にまた新しい音楽を創り出せるのかなと思います。

○小石 音楽の定義は、音楽学研究者もよく分からないので・・・。

○牧原 そうですね、私もそう思います。

○小石 「分からない」が正解だと思っているのですけれども、ただ私の専門がたまたま19世紀の西洋の音楽で、今ちょうどお話に出てきた五線譜で書くものなのですけれども、19世紀と言うとモーツァルトぐらいからベートーベン、ショパン、シューマン、メンデルスゾーン、ブラームスという、まるで音楽の授業の王道に行くようなところの研究、と言うとすごくわかりやすい感じがしていただけると思います。ところが、音楽は時間とともに消えてしまうものなので、音そのものは一つも資料として残っていません。私が研究するのに、当時のベートーベンの音やハイドンの音、バッハの音というのは全く聞いたことがありません。今、牧原さんのお話に出てきた五線譜が資料として残っています。あとそれを当時聞いた人の日記や手紙、批評文が載せられた新聞や雑誌など、そういう文字情報を読んで研究をしています。ちなみに、その文字もアルファベットが結構古くてややこしいのですが、そういうものを読んでいて、音というのは全く聞いたことがありません。

音そのものが記録できるようになったのは、私が扱っている時代から約100年後、20世紀になってからのことで、その時には楽器も変わってしまっているし、もう100年も経つと伝わっているものが全然違います。楽譜は残されているし、その楽譜を見てやっているので、恐らく似たようなものだろうと思うのですけれども、例えば20世紀初めに録音された演奏と現在の演奏会場で聞く演奏は、記録があるにもかかわらず違うのですよね。なので、今から200年前から100年前までというのはどれだけの変化があったかも想像できないくらい違うと思うのですが、その音なしで音楽を研究しているという状況としては一緒なのです。ただし、それは本日の映画のような、音楽から音を抜いてしまったものとはまた全然違うので、根本的な違いはありますが、でも音楽というのが大きな太いイコールで「聞く」ということと結ばれているのだという点では、実は違うのではないかなと思ってます。

もう一つ、19世紀のベートーベンやショパンが生きていた時代というのは、録音技術が発明される100年前なので、誰も録音したものを聞いたことがありません。つまり、

音楽という、何か大きなものの中の「音」の部分だけを切り取って録音することがない時代の音楽は、音楽を演奏する人を見るとか、音楽を自分で演奏して体を動かすということが100%であって、そこから音だけがくり抜かれて周りのものが全部捨てられてしまうという、イヤホンをつけて音を聞くという状況は0%だったというのは、私の専門として主張したい部分です。

○牧原 そうですね、少しお聞きしたいことがあります。音楽の起源というのは、誰がいつの時代に創ったものなのかということ、もし御存知なら教えてほしいのと、もう一点は、聞こえる人たちの場合はこれまで音楽が代々受け継がれて来ていますよね。五線譜がなかった時代から出来上がった時代へ、などという経緯がありますが、ろう者に関して言うと、そういうものはありません。そういう意味でもこの映画を制作することによって記録を残したいなというのもありました。このように視覚的に映像として、資料として残されているものはやはり聴覚的音楽に比べて非常に少ないですし、また歴史的にも浅いということも感じています。

○小石 音楽の起源はわかりません。というのも、ものを記録することができるようになったという歴史は物凄く浅いのです。人間が存在した歴史から言うと、もうこれっぽっちぐらいしか記録はされていない。一番記録が残っている西洋音楽ですら、その状況です。なので、音楽の起源は、「それは古いだらう」と音楽史の本にも書いてあるし、分らないです。

記録が残っている中の古いものというと、例えば五線譜の前は四線譜だったのですが、四線譜の記録で9世紀ぐらいのものが残っています。つまり、物凄く新しいということです。また、大部分の西洋音楽の歴史は、日本の歴史に置き換えると江戸時代以降の話なので、猛烈に新しいとっていただいて間違いありません。バッハでも江戸時代です。なので、いわゆる西洋クラシック音楽の歴史は物凄く新しい認識です。そんなに古くからあるものではありません。

ただし、音楽そのものは猛烈に古い、その対極的な関係を今肌で感じ取っていただくと凄く嬉しいです。記録されたものはとても新しく、今映画を記録として残したいと言ってくくださった様な、こういう映像技術はもう御存知の通りごくごく最近で、20世紀以降の話になります。

○牧原 本当にそうですね。録音の技術は昔からあり、今は映像の技術がすごく普及していますよね。この映画を制作するにあたり、過去の資料を色々調べてみると、手話の

ポエムというのがすごく多いように思います。もう一人の共同監督の雫境とも、色々な映像を見ましたが、やはり短いものばかりで長いものは余りなかったのです。ところがこの「LISTEN リッスン」が公開される頃、奇遇にもろう者の音楽をテーマにした出来事がシンクロするかのようにいくつかあちこちに起こっています。何かが始まろうとしている気がします。

因みに私は「音楽のようなもの」という言い方をあえてしています。ろう者の間では「音楽」に相当する言葉は見当たらないので、私が勝手に使っているだけなのですが、音楽に似ているということで「音楽のようなもの」と言っています。

○小石 もう一点つけ加えたいのが、音があるのを知らないとおっしゃいましたが、私の親戚に全く聞こえないお姉さんがいて、そのお姉さんに、私が中学生か高校生だったころ、ピアノを弾いて聞いてもらおうという機会がありました。それも「聞かせて、聞かせて、かつらちゃん、ピアノやってんのやったら聞かせて」と言われ、でも全く音が聞こえないのにいいのかなと思いながら一生懸命弾いたら、物凄く細かい具体的な指摘をされ、ピアノの先生以上に、「ここをこうしたらいいんじゃない、ここはすごくよかったよ」と言われ、聞こえないということが私には全然わからなかったという経験がありました。

だから、音のある世界を知らないからわからないというものでもないのだなと思いました。その時にどうやって聞いているのと質問したら、それは振動や指や鍵盤の動きを見ればわかるし、部屋の振動も違ったのでわかると言われたのですが、その感想や、ここがいい、ここをこうしたほうがいいよという指摘は、まるでピアノのレッスンを受けているようでした。

○牧原 とても面白い話ですね。多分振動に物凄く敏感な方なのでしょうね。実は、雫境も凄く感覚が敏感で、私は鈍感なほうでどちらかというと視覚的に敏感です。恐らくそれは人それぞれだと思います。

今のお話を聞いて思い出したのですが、音楽は耳から始まるのか身体から始まるのかという議論があると聞いたことがあります。歌を歌う聴者の友人が、身体表現が上手な人は歌も上手で、下手な人は歌も下手だ、と言っていました。確かにそうだなと思ったのが、以前オーケストラを見にいった時のことです。音は全く聞こえなかったのですが、指揮者が凄く下手だったのですね。演奏はどうだったのかなと思い、隣にいた聴者の友達に聞いたのですが、やはり演奏も下手だと言っていました。ですので、

身体を使うことと音は関係があると思います。先程小石先生がおっしゃった聞こえない親戚の方も、小石先生の指の動きを見て音と繋げておられたのではないのでしょうか。

○小石 今のお話なのですが、作曲家が作曲する時という話も私は自分の研究でよく扱いますが、こういうことを考えて、こういうことをやりたいからこういう曲を書いたんだという作曲家の思いを想像しようとする時、楽譜をずっと研究して見ていると、演奏者の「動き」を作曲しているなどというのがよく見えるポイントが出てきます。それは普通、作曲家は音を想像して、こういう音や響きをつくり出していこうと作曲していると思うのが一般的で、今までも音楽学研究ではそれが大前提だったのですが、よくよく調べてみると、体の動きをこういうふうに動かしてやろうというのを明らかに意図してつくっている部分があることがわかりました。

例えばフランツ・リストという作曲家がいるのですが、彼は、難しい作品を書いて、それを弾いてみせて喝采を浴びて有名になりました。ピアノという楽器は、左の鍵盤の左端から右の鍵盤の右端まで88鍵あって、左右の端と端を、両手を広げて同時に弾いたりするのが一番難しいのですね。なぜなら片方を見ていたらもう片方は絶対見えないので、視覚的なコントロールはきかないし、身体的にも離れるし、凄く難しい。難しい曲を弾いてみせて儲けようとする場合だと、右の端と左の端を同時進行で右手と左手で弾く曲を書くといいはずなんですけれども、リストの曲は絶対に両手が視界に入る場所に書かれています。

つまり、難しいはずのリストの曲は、実は弾くのはそんなに難しくない。ところが、想像してみてください。聴衆の側から見ると、ピアニストって横を向いて弾くと、左右に腕を広げて難しい弾き方をしても視覚的に冴えないですよ。全然格好よくないです。弾いている本人が難しいだけで、費用対効果が悪いのです。でも、右のほうに両手で弾いていて、先に右手だけをぼんと左のほうに飛ばしたら、身体的に飛びますよね。そうすると見栄えがすごくいい、逆も同じように、左手だけが交差して右に行ったりすると凄く格好よく見えます。さらに、弾く人にとってはそんなに難しくないで弾き外したり、へまして見せたりはしないし、費用対効果がすごく高い。リストはそれを狙って書いています。つまり、作曲する時に、音声だけではなくて、視覚的にそれが格好よく見えるかどうかを重要視して書いているというのがわかります。

また、2人で弾く連弾を沢山書いているシューベルトの場合には、2人の腕がくっつき合うと、右の人の左手と左の人の右手が時々踏んでしまいます。そうすると、重な

ってドキドキして嬉しいですよ。大概の場合は、ピアノの先生である男の人とお弟子さんであるお嬢さんと一緒に弾くので、その手がちょっと一瞬重なったらどきっとします。そうすると、曲の素晴らしさより体の触れ合いを目指しているのですよね。それが「音楽だ」というのが、歴史研究でとても面白いところなのですが、そんなふうに作曲家自体がそもそも音だけではないものを目指して書いていて、面白いなと思いました。この映画に似ていませんか。

○牧原 大変興味深いお話ですね。この映画に関して言えば、例えば雫境がイメージを出演者に伝えて、あとはその場その場で全て即興でやっていただきました。リズムや間なども、全て出演者にお任せしました。この映画制作で我々が注意したところといえば、その方の持っている手話の特徴や、普段使っている手話を尊重するという事です。つまり、私たちが考えているものをその通りやってくださいと言ってもその人の持ち味が崩れてしまいます。この映画で私が好きなシーンなのですが、髪の長い女性と短い女性が2人で演じているシーンがあったと思うのですが、あれも即興で、もう視線が合うとすぐにああいったシーンをつくってくれました。あの方たち、実はプロではありません。しかも、一発でオーケーをだすことができました。お二人は幼なじみでずっと同じろう学校で育って来ていつも一緒だったので、もう分かり合っているのです。ですので、目が合うだけでもシンクロして素敵な映像をつくれたのではないかと思います。我々監督はキャスティングや、いわゆる聴者でいう指揮者的なことをするだけにとどめました。

○小石 全体的に表現している人と人の間の空気が凄く振動しているのが私には見えて、それが凄く素敵でした。人の動きだけではなく、その人と人の空間が凄く素敵で、それこそが音楽なのかなと少し感じました。

先程オーケストラの話が出ましたが、オーケストラには楽譜に書かれていない弓の動かし方があり、それは一番前の人に呼応して後ろが合わせていくというものなのですが、オーケストラの列の組み合わせと、その間にある空気があり、オーケストラは半分くらい即興で、それが重なっていくのと、「LISTEN リッスン」に出てきた様な、即興の重なりというのが凄く本質を突いているような部分かなと思いました。

○牧原 それは、グルーブに近い感覚だと思います。グルーブというのは、言葉で説明するのは難しいのですが、黒人の方たちの間で活発な音楽です。日本人にはこのグルーブというのは難しいと言われています。この映画はグルーブみたいな感覚があるのか

など思っておりますが、まだまだそういった分析はできていないのが正直なところで
す。

音楽学の観点から色々と興味深いお話を聞かせていただき、聴者の世界でも音だけに
とられるのではなくて、身体的な動きであったり、またとらえた特徴をイメージし
ながら書く、というところで非常に通じ合える部分があるのだなと思いました。非常
に勉強になりました。

○小石 私も目が覚めるといいますか、目からうろこが落ちたといいますか、凄く勉強に
なりました。ありがとうございます。

○牧原 ありがとうございます。

○オストハイダ どうもありがとうございました。

最後、おっしゃられたように、確かに映像を見ると、楽譜のところや共演のところ、
それとグループにあるような、映画の中で恋人同士かどうかわかりませんが、男性と
女性がその場で、多分即興で演じていたような感じがしました。音があるかどうかは
別にして、共演するとか演じるということは音がなくても随分読み取れるということ
に感動しました。

ではせっかくですので、フロアの方からもし質問ありましたら、ぜひどうぞ。

○質問者1 質問ではないのですが、感動したのでその感想を伝えさせていただきたいと
思います。

私は長年身体表現を、ダンス活動をしおり、手話言語も何か共通するものがあるのだ
はないかと思い、本日参加させていただきました。ある時、イスラエル人の講師の先
生に無音で踊ってみてくださいと言われてました。やはり耳で聞いて踊ることしかやっ
ていなかった私にとって、無音で踊るということにはとまどいました。その時にイス
ラエル人の講師の先生が、「自分の中に必ずリズムがあると思います。例えば心臓の
音、脈の音、それを使って感じて踊ってみてください」と言われました。それをもと
にまた相手の人とコンタクト・インプロビゼーションという形で共演をしてみてください
とも言われました。今回の映画を見て、私は出演者の人それぞれがそれぞれの個
人から生まれる音楽、リズムがあり、それを表現されているなということを実感し、
どんな人にも身近に楽しめる自分の体から発する音楽があるのだということを実感し、
本当に視覚的に見ることができ、とても興味深かったです。今後も引き続き、牧原さん
の思う音楽をぜひ表現していただきたいと思います。また、身体表現につな

がる部分もあり、非常に興味を持ちました。本日はありがとうございました。

○牧原 ありがとうございました。

○質問者2 素朴な質問なのですが、映画を拝見させていただき、聴者である私から見ると、ミュージックビデオを見ている感覚が少しありました。ろう者の方もたぶんミュージックビデオやバンドのライブ映像を見たことがあるとは思いますが、そのようなミュージックビデオの楽器を演奏している部分や、役者の人が演じた物語のようなミュージックビデオを、ろう者の方が見た時に、どのように感じられるか、この映画を見て少し気になりました。

○牧原 聴者がつくるプロモーションビデオのようなことですよ。きっとミュージックビデオというのはそういうものを指しておられるかと思うのですが、私自身、実際そういうのを見るのが非常に好きで、幼いころからよく見ていていました。ミュージックビデオは、非常に写像的につくられてる感じがします。想像がし易いといいますか、零境も同じように言うておりました。音は聞こえなくても見るのは好きというろう者は意外と多いので、やはりそういう点でも音楽というのは耳に固執しないで楽しめる方法があるのではないかなと思います。

あと、私は余り好きなほうではないのですが、太鼓が好きなろう者も沢山います。他にラップが好きなろう者ももちろんいますし、そうでないろう者もいます。ですのでこれは好みの問題であって、聴者だから、ろう者だからではないような気がします。同じように本日の映像を見ていただいても、人それぞれ感じ方が違うと思います。

因みにろう学校では、音楽の授業が太鼓しかしないという学校もあります。やはり振動で楽しみやすいので。しかし、太鼓しか楽しめないのは非常にもったいないのではないかと私自身は思います。太鼓は学校で嫌という程させられたので、嫌気がさしているのかもしれませんが。

どちらかという、この映画は私も零境も一般的なところから少し逸れていると思っています。やはり非言語的なものが私は好きで、零境のほうは身体表現的なものを好みます。「手話ではない手話」というと、少し変な言葉かもしれませんが、そういうものを取り込んだのが今回のこの映画です。

今みたいなお答えでよろしかったでしょうか。

○オストハイダ どうもありがとうございました。

時間になりましたので、これで第一部を終わらせていただきます。

牧原監督、小石先生、どうもありがとうございました。

○小石 ありがとうございました。

○牧原 ありがとうございました。

【第二部】『人は言語をどう習得するか』

講師：岡 典栄氏（学校法人明晴学園国際部長）

棚田 茂氏（埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園主幹教諭）

司会：森本 郁代（関西学院大学法学部教授／手話言語研究センター副長）

○森本 第二部は、講演と対談ということで、「人は言語をどう習得するか」というタイトルでお二人の方にお話しさせていただきます。

私は、この第二部の司会およびモデレーターを務めます関西学院大学手話言語研究センターの森本郁代と申します。どうぞよろしく願いいたします。

まず、本日お話しいただく二人の先生方の御紹介をしたいと思います。

まず、岡 典栄先生ですが、岡先生は、東京大学文学部言語学科、国立障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科を御卒業になり、イギリスのケンブリッジ大学で言語学修士、そして一橋大学大学院言語社会研究科で博士号を取得なさっておられます。現在、学校法人明晴学園の国際部長、また東京経済大学の非常勤講師をなさっておられまして、手話通訳士でもいらっしゃいます。

次にお話しいただく棚田 茂先生ですが、棚田先生は筑波大学附属ろう学校をご卒業後、大学で情報数学を専攻なさったそうです。そして、システムエンジニア、市役所などのお仕事を経て、現在、埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園で主幹教諭をなさっておられます。棚田先生は、D P R Oという団体の代表もなさっておられまして、また手話訳聖書の制作のお手伝いもなさっているそうです。

本日は、この「人は言語をどう習得するか」というテーマで、まず岡先生のほうから聴者の言語獲得について、ろう者とどう違うのかといった視点を織り込みながらお話しいただきます。そして、棚田先生から、ろう者の手話の獲得についてお話しいただくことになっております。

それでは、早速御講演を始めたいと思います。

岡先生、お願いします。

○岡 皆様、こんにちは。ただいま御紹介にあずかりました岡と申します。

本日は、「人は言語をどう習得するか」というお話で、私の担当は聞こえる子供ということになります。私は、必ずしも言語習得の専門ではないので、本日、私に課せられた課題というのは、聴児の言語獲得を詳しく御説明するというよりは、聴児の言語

獲得とろう児の言語獲得がどういうふうに違うのかということを中心にお話しすることだと思います。

人間は誰もが母語を獲得することができることになっていますと言うと変ですが、人間は誰でも何かの言語を話すようになります。いきなり森の中に捨てられてオオカミに育てられるとか、そういうことがない限り、普通に人間社会の中で育っていけば、その生まれ育った社会で使われている言語を、言ってみれば勉強することなく、自然に身につけることができます。

ところが、第二言語の習得は人によって異なります。例えば皆様の中に、英語や中国語が非常に得意だという人もいらっしゃると思います。色んな理由で自分にとっての第二言語が非常に高いレベルに達していらっしゃる方もいると思うのですが、中には、よく不満として聞かれる、中、高、大で随分長い間英語を勉強したのに全然使い物にならないとか、日本だと逆にそういう例が多いのかもしれない。母語以外の言語の習得というのは実は個人差が出るところで、うまくいく場合とそうでない場合が明らかにあります。だから、第一言語は誰もがいわば努力なくして身につけることができるのに対して、第二言語というのは勉強しなければならず、その結果もまちまちだということになります。

次に、聞こえる赤ちゃんの話ですが、聞こえる子供はどうやらお腹の中にいる間からもう聞いているようです。だから、例えばドアベルがピンポンと鳴ると、それにきちんと反応し、びくっとするなど、そういうこともあるようです。いずれにしても、聞こえる赤ちゃんはお母さんのお腹の中にいる状態で、もう既に色んな音を聞いています。

ここから先は、私には、よくわからない部分もありますが、例えば聞こえない赤ちゃんでも、お母さんの心音や、血液が流れる音など、感じるができているのではないかなと思います。

さて、聞こえる子の話に戻りますが、生まれたばかりの子供も他の女性の声よりも母親の声を好むという研究の結果があります。それから、生後4日目の子供は既に外国語よりも母語を好むという、自分が知らない言語の言葉といつも聞いている言語では反応速度が違うという報告もあります。要するに、自分が知っている母親の声に一番よく反応するということですね。だから、言ってみれば生後4日目でもう既に自分にとって馴染みのない言語と自分の母親が使っている言語が違うということが聞き取れ

ているということになります。

7カ月半ぐらいになると、切れ目のない音の連続から単語を切り出すことができるようになるのだそうです。単語ごとに切り出すことができるようになるということは、単語の切れ目がどこにあるかがわかっているということなのですね。それが聞こえる赤ちゃんの場合だと、もう7カ月半ぐらいからわかるようになるということだそうです。

それと同じような時期からどんどん発達してくるのは、母語で使わない音は聞き分ける必要がないから聞かないというもので、これはかなり早い段階で始まります。だから、日本人にとってら行の「らりるれろ」というのは一種類の「ら」の音しかないのので、日本語にとって、英語の r a と l a は同じ音でいいんだよというくくりになります。そんなところは聞き分ける必要がないので、聞き分けないという選択を脳がすると言ったらいいでしょうか、それは言語を習得するために必要な、要らないものを捨てるという大事な力になります。

その切れ目のない音の連続から、単語を切り出すことができるとはどういうことかを少しだけ御説明したいと思います。よく英語がちゃんと聞き取れない、自分が言った英語が通じないというときの例によく出てくる「igetoff（あげどうふ）」を取り上げたいと思います。「揚げ豆腐」だとひとかたまりに聞こえるのですが、英語だと、実は i get offの三つの単語からなっています。それを日本人が「アイ・ゲット・オフ」と一つずつ発音すると通じないという例です。

では切れ目は、どうやってわかるのだろうかという話ですが、プロソディーは胎児期から聞き取り記憶されております。プロソディーというのは、音の調子などのことで、アクセントやイントネーションよりももう少し大きな概念なのですが、しゃべっているときのリズム、流れや、高低など、全体の節回しを頼りに切れ目を見つけていきます。

一つ外国語の例でお示ししたいと思います。私も知らない言語で、「melikalikamaka」という言葉があります。知らない単語で切れ目がわからないと、どう読んでいいのかもわかりませんよね。これ、書かれた表現になると、「Mele Kalikimaka」となるそうです。どうやらmeliのところは一切れ目あるようです。答えは、「メリークリスマス」をハワイ語で書いたものだそうです。私たちは「メリークリスマス」と書きますが、でも恐らくもとの「Merry Christmas」からは同じぐらい遠く

離れているということになります。

特に、知らない音を切り分けていくときには、その人が持っている耳によって凄く違って聞こえたりしているということですね。今年、酉年ですが、日本ではニワトリは「コケッコー」と鳴くと言われますが、どうやら英語圏の人には「コケッコー」とは聞こえていないらしいですね。音とはそういうもので、同じ音を聞いていてももしかしたら別のように聞こえるかもしれないということですね。

先程の「igetoff (あげどうふ)」に戻ると、一つ一つ、i get offというふうに切れ、「whattimeisitnow (ほったいもいじるな)」はwhat time is it nowというふうに切れます。逆に私たちが勉強した通りに、what time is it nowと言うと、これは通じないというまた大きな問題があるわけです。それは何が悪いかというと、個々の発音が悪いのかもしれませんが、全体のプロソディーが壊れているとか、音韻の結合の仕方が間違っているということもあります。聞こえる子供が母語を自然に身につけていくのであれば、こういうことは特に問題なくわかるようになっていきます。逆にわかっていない状態だとどういうふうになるかというと、これはよく乳幼児の過ちとして見られる例ですが、「めががいたい」や「めめがいたい」や「ちががでた」、これは「めがいたい」や「ちがでた」というと多分聞き取りにくいというのがあります。子供は、「めがいたい」では、多分何か一つリズムが足りないと感じるのでしょうね。だから、「めめがいたい」となるわけですね。大人も子供に話しかけるときに「おめめ」や「おてて」や「おみみ」と言いますよね。耳だけはもともと「みみ」なのですが、単音節の言葉は、「て」や「め」と言われると、やはり聞きにくいことがあり、そこが繰り返しになっていることがよくあります。

あと、例えば「おなか」は十分わかりやすい単語のような気がしますが、子どもに対してよく使われるのは、「ぼんぼん」と言ったり、足が「あんよ」になったり、靴が「くっく」になったりということがあります。「わんわん」、「にゃんにゃん」、「ブーブー」などもありますね。私たち日本人は犬を「わんわん」と言いますが、「わんわん」と思っていない人たちも世界中に沢山おり、いずれにしても形式的に「わん」ではなく「わんわん」だし、「ニャー」だと「ニャー」と音をのばす、または「にゃんにゃん」や「ブーブー」など、繰り返す言葉が多いです。小さいうちはそういう繰り返された形で使い、最終的には大人の形に整理されていきます。

小さい子供たちがどういうふうな状態で音を聞いているかを考えてみると、例えばバ

ギーに乗っている時からでも、お母さんは常に後ろから話しかけています。「〇〇ちゃん、今日はいいお天気ね」や、「ああ、あそこにわんわんがいる」などと話しかけています。親が後ろからバギーを押しているのを見ると、結構子供が寝ているのに話しかけたりしていますよね。もちろん対面式というバギーもあるので、ちゃんと目を見て話をしながらということもあるかもしれませんが、親は、別に今子供が見ていないから話さなくていいわ、とはならず、どんどん話しかけています。

もう少し大きくなって、子供を自転車の後ろに乗せている場合も、よく聞いてみると、「今日〇〇の歌を習った」など、子供が学校で習ったことをお母さんに報告したりしています。そうすると、「聞こえなかったからもう一回歌って」などとお母さんが言って、またそこで反復練習のようになり、ずっとこの背面からでも会話は続いていきますし、言ってみれば言語の練習が続いているという感じだと思います。

これは、耳は閉じることができないということが大きな特徴としてあると思います。耳は自分の意思で閉じることができませんよね。そこが耳と目で大きく違うところで、目は閉じることができます。この「目は閉じることができる」というのは、後半の聞こえない子供の話につながるのですが、我が校でも子供同士でけんかをしていて、どうしようもなくなった時に、目を閉じるという行為があります。言ってみればもう見たくもないということなのかもしれないけれど、目を閉じて顔を背けられてしまうと、そこで会話が終わってしまいます。耳だと、ずっとその後でも悪口を言ったり、ののしったりすることが聞こえるのですが、目に関しては、一旦閉じられてしまうと、そこで終わりになってしまいます。

他方、耳は閉じることができないということは、どういう特性につながっているかというと、努力しなくても情報は自然に入ってくるということなのですね。つまり、別に「勉強しよう」とか「このことについて知ろう」と思っていなくてもたまたま自然に耳に入ってきてしまうことが結構あります。よくカクテルパーティー効果と言われるのですが、病院の待合室でざわざわ色々な音がしている状況があるとします。例えば自分も隣にいる人と話しているかもしれない。しかし、「岡さん」と自分の名前が呼ばれたら確実に聞こえるのですよ。それは自分の声に対してだけは凄く感覚が鋭いということもあるのですが、様々な聞こえている音の中から自分に必要な音はとりわけよく聞こえるという聞こえ方を、私たちの耳は持っているんですね。だから、周りで聞こえている音の中から自分にとって必要な情報は意外と選択的に耳が捕まえてくれ

ているのです。

では、聞こえない子供たちはそういうことが起きにくいのか、というのが、今我が校がすごく悩んでいるところなのですが、偶発的に情報が入ってくるということがないということになると、全ての学習を意図的にしないと、欲しい情報を捕まえることができないということにつながっているのです。

ただ、私が言いたいのは、耳が聞こえないということは、不便だとかかわいそうだとか気の毒だとか大変だとかということではなく、聞こえないのであれば、聞こえない子に合った、聞こえない子が自然に持っている言語習得方法があるはずだとは思いません。

例えば手話だったら、電車の中と外で、普通に自由に会話ができるし、建物の中でも、上の階と下にいる人が視線が届く限りはどこにいても会話ができますよね。だから、そのような空間では情報共有がしやすいということになります。

ただ、見えていないとだめなので、注意点は、例えば災害時に停電した場合、聞こえない人は、真っ暗で見えないから物にぶつかって危ないということ以前に、暗くて見えないということは、言語が通じなくなっているのだということです。ここには別途の気付きが必要だと思います。

もう一つよく言われるのは、ろうの赤ちゃんはすごく反るのですよね。それが聞こえないことによってもたらされる2次的障害だみたいに使われたりするのですが、とにかく360度、彼らは見たいのですよね。だから、自分の頭が動く範囲を過ぎてしまうと、今度は反ってでも見たいという行動をとりますし、それが彼らのやり方なのです。彼らが言語を身につけていく方法は、多分私たち聞こえる人間とは凄く違うのだらうと思います。

ここからはおまけの話なのですが、私たちが母語として持っている日本語と彼らが母語として身につけている日本手話というのは、大変に違う言語なんですけど、ともに対等な人間言語であるということは間違いありません。その言語間に、どちらが優れている言語であるという差はありません。ただ、モダリティーが違うだけ、これは言語を発音するときの方法が違うということです。私は今声を出していますが、手話であれば手を使う、などの道具立てが違うということですよね。だから、それぞれの言語に合った習得方法があり、それを使った習得が自然に行われるのだと思います。

よく言われる問題に最後に一点だけ触れておきたいのですが、それはろう児の日本語

習得という問題です。これは第二言語習得の話になります。ろう児は環境にもよりますが、日本手話という言語を持って育ちます。でも、日本で暮らしている以上は、看板やチケットを買うときの自販機の文字なども読めなければいけないということであり、日本語を習得する必要性に迫られています。その時の習得方法は聴児と同じでいいのかというと、多分これは違いただろうと思います。視覚優先のろう児に合った日本語習得の方法が、そしてまた指導法がきつとあるのだと思うのですが、なかなかこれだという決め打ちは少なくとも今までできておらず、全世界でこれだというのが実はないので、日本だけの問題ではなく、まだまだこれからの大きな未解決課題として残っています。

私の話はここまでです。ありがとうございました。

○森本 岡先生、ありがとうございました。

それでは、次に棚田先生からお話をいただきたいと思います。

○棚田 大宮ろう学園から来ました棚田と申します。

テーマは「手話の人・目の人～言語獲得の観点から～」です。この写真は、大体15年～20年前、手話ポエムをしているときの写真です。このポエムの内容は、生まれながらにして耳が聞こえない、つまりろう者であるということを前面に出したものです。

では本題に入ります。まず聞こえないことについて、一般的に言われているのは病理学モデル（医学モデル）ならびに、障害の社会モデルの二つです。これらについてまず具体的にお話しさせていただきます。

病院の医師から診断を受ける際、聴覚障害の程度を決める基準があります。聴力が100デシベル以上の場合、一般的には、「ろう」と言われる重度難聴になります。この数字が低くなるに従い、高度難聴、中度難聴、軽度難聴と区別していきます。軽度難聴とは、周りが静かであれば音が聞こえる程度で、20デシベルぐらいです。人工内耳を装着すると、20デシベルの音も聞こえるようになるだろうと言われております。ただ、音と言うのは非常に複雑ですので、細かい音まで判別できるかどうかというのは、それはまた別の話ということになります。

ろうの子供が補聴器や人工内耳を装着した時の聞こえ方は、聴者と比べてかなりの違いがあります。音があることがわかりづらかったり、また音の聞き分けが難しいということもあります。例えば蚊の飛ぶ音は、聴者のみなさんにとって結構耳障りだったりするようですが、ろう者は聞こえないと気付かないうちに刺されることが多いです。

また私自身、職場などでお昼御飯の前にお腹が鳴っていると隣の人に言われたりすることがありますが、自分自身は聞こえていません。また、咳なども非常に我慢をしながらしても、周りの視線を感じて、実はこんな音も周りには結構聞こえているのだなと思います。

また、ろう者は意外と発音が苦手です。発音というのは実は難しいんですね。当然耳から音が入ってきませんので、自分の声に対するフィードバックもないわけです。発音のコントロールがなかなかうまくできないので、音の大きさ、話す速さなどアクセントなどが自分でもわからず調整しにくいということがあります。

では、耳が聞こえない分、視覚に優れているから目からどんな情報も正確に入手できるのかというと、必ずしもそうでもないのですね。読話というのがありますが、意外と難しいのです。大分昔の話ですが、プロ野球などで、ろう者に口の動きを見させて監督の話を読み取らせるようなことがあったらしいのですが、実はそれは全然うまくいかなかったようです。具体的に、例えば単語レベルですと、「卵」という単語は、口の形だけで言いますと、「たばこ」とか「ナマコ」と読み取ることもできます。「おじさん」と口の形が似ている日本語はありますか。「おじいさん」とか「お兄さん」と読み取ることもできます。口の形だけを見ても判別は難しいです。また、「1時」と口の形が似ている単語は何ですか。「2時」とか、「7時」もあります。このあたりは幾ら口をじっくり見ても、なかなか限界があります。

ここまで、障害の社会モデル、また病理学モデルからの視点をお話ししましたが、新たな概念として文化言語モデルが提案されました。パティ・ラッドという、イギリスのプリンストン大学で博士号を取得された、ろうの研究者が提唱したものです。4年程前には、来日されて講演をされました。

聞こえる皆さんにとっての第一言語は日本語ですよね。では、ろう者にとっての第一言語は何かというところで、注意していただきたいのは、第一言語と母語の関係についてです。この考え方は人によって異なります。岡先生の話にもありましたが、まず親と子供と会話して生活をする言語を母語といいます。第一言語はどうでしょうか。例えば親が聞こえて、子供が聞こえない場合に母語がどうなるのかということになりますね。ろうの子供にとっての第一言語は手話が一番ふさわしいわけです。自然な状態で獲得する言語のことをここでは「第一言語」または「母語」という言葉を使わせていただきます。

皆さんは、ろうの子供たちが自然に言語を獲得するにはどのような方法があると思いますか。ろう学校に通って手話を学ぶのも方法の一つですね。そして、ろうの子供は体のどの器官を使って言語を獲得するのでしょうか。耳からの獲得はできますか。いえ、ろう者が言語を獲得する上で目が非常に重要なポイントになります。つまり、ろう者、ろう児のことを『視る人』と解釈することもできるわけですね。『見て』情報を得る、手話を見て、決して耳ではなく、目で情報を取り込むのですね。目を通して言語を獲得していくという意味で、ろう者は『視る人』とも言うことができます。『視る人』、人によっては『目の人』とも言いますね。また先程紹介しましたパティ氏は、『手話人』とも言っています。『目の人』、『視る人』または『手話人』とも言うことができますね。ろう者は、目で情報を得て言語を獲得しているのです。

見ただけでろう者か聴者かという区別はできますか。今、例えば、人が沢山集まっている時に、この人はろう者でこの人は聴者という区別は難しいですよ。例えば手話で会話をしていると区別はできるかもしれませんが、また、大きな音がして、音のしたあたりを見た人が聴者、見なかった人がろう者だと区別できることもあるかもしれません。そのような行動様式や、内面的なところでもろう者と聴者の区別をすることができるかもしれません。そこが文化言語モデルが、障害の社会モデル、また病理学モデルと違う点です。

ろう者というのはどういう人たちなのか。まず日本語とは異なる言語を使う人たちです。そしてその言語とは、手話です。また、ろう者は外国人のようであると考えてもいいかもしれません。例えば私の勤務校でも聞こえる先生はろうの子供たちを前にして非常に戸惑います。日本人だけの学校に外国人の子が来ると、皆が戸惑う様子と似ています。また、家庭において、外国人の場合、親も子供も聞こえる場合は普通に言語の継承はできますが、ろうの子供と聴者の親では、親子関係に血のつながりがあっても、行動様式などが違うため、文化の継承ができないということになります。例外的に、ろうの親子、つまりデフファミリーや、CODAという、聞こえない親から生まれてくる聞こえる子供たちは、ろう文化を継承することが可能です。そこが聴者とろう者との違いとも言えましょう。デフファミリーやCODAの場合、手話という言語は自然に継承されますが、聞こえる親の元に聞こえない子供が生まれると、必ずしもそれは行われないうちですね。

さて、ろうコミュニティというものがあり、共通の認識や趣味などを持ったろう者が

集まります。例えばサーフィンが好きなろう者のグループがありますが、聴者と一緒にグループを作ることは少ないです。ダンスが好きなろう者は、聴者から色々ダンスの技術を学びますが、ろう者だけでグループができたりします。このように、ろうコミュニティの中にも色々なグループがありますが、そこで話される言語は当然手話です。また、デフリンピックという世界的なスポーツイベントがありますが、オリンピック競技と同様、世界中のろう者が集まって競技をします。皆様御存知の、障害者のオリンピック、すなわち、パラリンピックというものがあり、これは肢体不自由の方や見えない方など、身体障害者を対象としたオリンピックです。でも、実はこのパラリンピックにはろう者は出場していません。なぜでしょうか。実は、デフリンピックはろう者だけが集まるオリンピックとして昔からありました。パラリンピックのほうが歴史は浅いのです。やがて、パラリンピックができた時にデフリンピックを融合させようかという話があったのですが、やはりデフリンピックが目指すものはパラリンピックにはそぐわないということで、再びデフリンピックを開催するようになったのです。他の障害の人と楽しむのもいいのですが、やはりどうしてもろう者同士で競い合いたいということで、パラリンピックとは独立してデフリンピックが開催されています。次回は2017年にトルコのサムスンで開催されます。

次に、私が勤めているろう学校の幼稚部を御紹介します。

大宮手話フォントと言いまして、大宮ろう学園だけで使用していた手話記号がありました（※現在は使っていない）。指文字とはまた別です。それを見せて子供たちがその手話記号に合った手話を表現するというのをしていました。ともかく子供たちは素直ですので、他の子供が知らない手話を自分が知っていたりすると、非常に積極的に手を挙げます。

幼稚部の手形あそびで



【単語リスト】（日本語ワベル計47単語）

	ㄨ	ㄣ	ㄹ	ㄷ	ㄱ	ㅇ	ㅁ
1	アイス	一番	アンパンマン	指文字の「う」	音	お茶	おぼあさん
2	あかちゃん	おこる	指文字の「き」	うた	汗	上へ爆発	鼻くそ
3	男	けんか	つくる	給食	絵日記(本)	双眼鏡	鼻くそほじる
4	きのこ	ペナクター	病気	絵を描く	熱	ママ	ママ
5	ハバ		ボクシング	たばこ	おぼけ	爆発	耳をほじる
6			病院	鼻	ハン	約束	
7				相撲	笛		
8				明かれる	望遠鏡		
9				ドア	マイク		
10				ハンと叩く			
小計	5	4	5	6	11	10	6

例えばこちらの表にあるものが大宮フォントなのですが、指文字で言うところの「あ」、「い」、「き」、「う」、「て」、「お」、「い」にあたる手形です。これら子供たち

に見せて、自分の知っている手話を表現してもらいました。恐らく4歳か5歳ぐらいになると手話の語彙も急速に増えますし、やはり子供たちは自然に手話を獲得しているのだなということが表の結果を見てもよくわかります。この手形遊びを担当している先生はろう者で毎日子供たちとかかわっているのです、子供たちは先生から自然に手話を獲得しているということですね。ただ、聞こえる先生の場合のデータをとったことが今までないので、比較することはできませんが。

次に、ろうの子供たちの話し方のなかで、非常に特徴的なものがありますので、幾つか紹介したいと思います。友達と話す時と教師と話す時、子供たちは話し方を変えています。目上の人に対しては、姿勢を正して、目上の人に対する相応の話し方をします。また、友達と話す時の順番の取り方があります。例えば友達が先生と話をしている時に、自分が会話に入りたいとしますね。その場合は必ず終わってから自分が会話を始めます。また、先生と他の子供が話している時に、どうしても自分がその中に割って入りたい時は、話している先生のほうを見ながら話している子をとんとんたたき、会話を終わらせてから話すというように、子供たちの中で共有したルールみたいなものを持っているんですね、教わることなく、自然に身につけています。

また、100円マックを買いに行くときに「200円じゃなくて100円のマックだよ」と言うように、先に否定表現をします。そのような日本手話の話し方の特徴（対象の特定化）を、子供たちは自然に獲得しています。

今、ほとんどのろう学校では、子供たちの言語環境が中途半端になっているところが多いです。例えば公立のろう学校ですと、声を出しながら手話を使う、日本手話を使う、音声日本語だけ使うなど、混在したコミュニケーション環境にあります。色々な子供たちがその場にいる時に、子供たちの集団では、日本手話のグループ、声を出しながら手話をするグループという、手話をベースにした二つのグループが出来上がっています。これが、今の公立ろう学校の現状だと思います。

コミュニケーションストラテジーとは、コミュニケーション運用を戦略的に考える能力のことですが、例えば、皆様が外国人の方とコミュニケーションをとる時、普段とは違うような様態をとりますよね。そこで、ろうの子供たちも同様に、例えば自分よりも少し年下の子と話す時は意識してより分かりやすい話に変えるとか、手話が未熟な先生に話を合わせるなど、相手に合わせてコミュニケーションの方法を変えたりしています。また、子供同士でも、先生の話がわかっていない子供がいる時は、理解し

た子供がそうでない子供に対して通訳の様に説明をしてあげたりすることも自然に行っています。それは幼稚部、小学部、中学部、どれを見ても結構見られる光景です。

このようなストラテジーが高い子に育てるにはどうすればいいのか。やはり色々な経験をさせることです。また、先生がろうの子供たちの集団にあまり介入しないこと。自然に子供たちの中で育つように、子供たちの集団を尊重することが重要ではないでしょうか。

今、ろう学校では様々な課題があります。子どもたちは、やはり成人のろう者と触れ合うことが少ないですね。ろうの子供たちの90%以上の親は聞こえる親で残りの10%が両親もろうです。つまり、ほとんどのろう児は大人のろう者と出会う機会、触れ合う機会が非常に限られているということです。ろう学校では何とかろうの子供同士、またろうの先生と沢山関わっても、家に帰ると聞こえる親との関わりになりますね。

ここで、ろう児の言語使用状況について説明します。

ろう学校の中でろうの教師に対しては圧倒的に日本手話を使う傾向が高くなり、音声日本語を使う傾向は低くなります。逆に、手話ができない聞こえる先生に対しては手話を使う傾向が低くなり、逆に音声日本語で伝えようとします。実際子供たちは日本語の語彙を沢山持っているというわけではありませんが、少ない語彙の中で一生懸命音声日本語で伝えようしているのです。

「手話」といっても、日本手話と日本語対応手話の二種類があります。ろう者が自然に獲得した手話を日本手話、日本語の語順や日本語の文法に当てはめて表現した手話を日本語対応手話と言います。実際ろう学校ではこの二種類が先生によって使われているわけですね。

日本手話の特徴は、日本語とは全く異なる文法体系を持つということ、音声を必要としないということ、また、写像性が高いということが挙げられます。一方、日本語対応手話の特徴としては、日本語に基づいた文法を使い、日本語に相当する手話の単語を日本手話から借用して使います。つまり、これは人工言語のようなもので、完全な言語とは言えないのではないかと思います。

事例を挙げますと、こちらに「高速道路では車間をとって走る」という日本語の文例があります。もしこれを日本語対応手話で表すと、車と車の間にある空間を/取る/（※斜線（/ /）で囲まれた単語は手話ラベルの意）という意味になり、車同士が追突してしまいます。これだと子供たちは誤解してしまいます。実際、高速道路では車

を追突しながら走らないといけないのだと、真面目に理解していた子供がいました。そのように間違っ理解させてしまうということも、日本語対应手話の大きなリスクとして挙げられますね。

他にも例を挙げます。日本語対应手話でやると、/関東/ /一円/、これを見て、「何で関東だけが1円なのか」と言った子供がいました。/食/ /間/というの、「食事中に薬を飲む」という意味になってしまいます。「食間に薬を飲む」というとそれは普通、例えば朝食と昼食の間を指しますが、御飯中に薬を飲みながら御飯を食べなければいけないと思った子供もいます。

ですので、日本語対应手話の限界を打破するのは、非常に至難のわざと言えます。日本語対应手話は、日本語に基づいた語順で日本語どおりの文法を使って話すので、それと全く違う言語の日本手話を母語としてるろうの子供たちからすると、間違っ理解してしまうという危険性があるわけです。特に、日本語の力が未熟なろう児に対し、日本語対应手話で話すと、非常に間違っ理解させるケースが多くなります。また、写像性に乏しいのも日本語対应手話の特徴です。はっきりと言えることは、ろうの子供たちにとって自然に獲得できる言語は日本手話だということです。

最後に、皆様にどうしてもお伝えしたいことは、日本語の習得プロセスについてですが、聴者とろう者とで大きな違いがあります。聴者の場合は、先ほど岡先生の話にもありましたように、周りの音が自然に耳から入ってきます。そして、そこから読み書き能力を身につけることが可能です。一方ろう者の場合は自然に音が入ってきませんので、おのずと目からの情報が中心となります。つまり、ろう児の日本語習得には、聴者とは違った教授法が必要となります。

ただ、日本語教授に関する効果的な方法について、この方法なら日本語をろうの子供たちが100%習得できるというような王道はまだ日本にはありません。自分たちで色々なコミュニケーションをとりながら言語をしっかりと獲得していく、そして、第二言語として日本語、また英語などを習得していく上で、やはり日本手話というのは非常に大事な言語だと思います。また、それをどのように工夫していくのがろう学校にも課せられた課題かなと思っております。

御清聴ありがとうございました。

○森本 棚田先生、ありがとうございました。

先生方、どうもありがとうございました。

最後に少し3人で対談をさせていただきたいと思います。

本当に色々なことをお聞きしたいなと思うのですが、最後にフロアの方の質問をお受けしたいと思いますので、私から幾つか先生方にお尋ねさせていただきます。本日は先生方に、聴者の子供とろうの子供の言語習得の環境の違いについてお話を伺いましたが、先生方お二人ともお話しされていたと思うのですが、親が聴者の場合のろうの子供の日本手話の獲得というのが、恐らく色々困難を伴うかと思いますが、実際にはそうやって日本手話をきちんと獲得していく子供もいれば、もしかしたらそこに困難を感じている子供たちもいるかと思うのですが、実際にろう学校で教えられていて、親が聴者のろうの子供が日本手話を獲得するにあたってどういった課題があると思われますか。

岡先生からお願いします。

○岡 多分、子供の獲得にはそれほど問題はないと思います。それはつまり、親の習得には大いに問題がありということです。というのは、親は日本手話に接する時期が非常に遅いからです。人生で初めて会ったろう者が自分の子供だったというところから、聞こえる親のろう者体験が始まるので、凄く遅いです。少なくとも我が校で見ている限りでは、クラス全員が手話をする子供たちなので、子供たちの獲得や発達に、親がろう者か聴者かというのは余り影響していないように思います。文化面では、親がろう者のほうがはっきりと継承されているのがわかるのですが、言語面についてはあまり関係がないです。

○森本 棚田先生、いかがでしょうか。

○棚田 そうですね、環境が違い過ぎるので、やはり聴の親の場合は、自分のろうの子供に対して音声をきちんと話せるようになって欲しいというようなニーズが高いですね。声がなくともきちんと手話でコミュニケーションが取ればいいと特にろうの先生は親御さんに話をするのですが、でもやはり聞こえる親御さんは声で話せる子供に育ててください、学校でそう教えてくださいと言われることが多いです。親御さんたちに日本手話に対する理解を深めていただき日本手話の重要性を明らかにしていくのが、まず一番の課題だと思います。

○森本 今、先生方のお話を聞いていて思ったのですが、岡先生は明晴学園という、手話で教育する学校で教えておられて、棚田先生は特別支援学校で教えていらっしゃるという、そういった環境の違いもあるのかなと思うのですが、棚田先生の御講演の中に

聴者の教師がろうの子供にどう接するか、最初の頃は大変で戸惑うようだというお話がありました。明晴学園でもそういうことはあるのではないかなと思うんですが、例えば私が自分のクラスにろうの学生がいた時に、どうしたらいいかわからず、きっとすごく戸惑うと思います。先生方から見ていて、例えば私のような素人が、ろうの子供や、学生が来た時に、どういうふうに接したらいいと思われるか、ぜひアドバイスをいただきたいのですが、いかがでしょうか。

○棚田 アドバイスになるかどうかはわかりませんが、意外とろうの先生もろうの子供たちのことを見落とししたり、また間違っ理解してしまったりすることがあります。ろうの先生自身も手話力を非常に高めないといけないのです。ですので、ろうの先生自身も自分たちの母語が日本手話であっても、手話を研究し、子供たちにきちんと伝わるような指導が必要なのですが、これとって体系化されたものがまだ日本には十分ありません。日本語教育に対しては研究は盛んであると思いますが、ろうの子供に対する日本語の教育をどのようにすればいいのかというのは、それはろうの先生もまだまだ抱えてる課題でもありますし、やはりまず子供たちの求めているものや、子供たちを見抜く力がまず必要とされることは、間違いないと思います。

○森本 岡先生、いかがでしょうか。

○岡 森本先生が接されるような、かなり大きくなった大学生レベルの場合であれば、一番大事なことは、恐らくその学生本人が自分にとって何が必要であるかを言えることだと思います。周りが、何が出来るかを考えた時に、本人が一番自分にとって必要なものがわかっていなければ、どうにもできないことはあると思います。それは言語の保障の問題とは別に、今までの成長過程で、例えば自分が聞こえる人たちの世界に入っている状態であるのならば、その状態を聞こえる子供たちの学習環境と同じようにそろえるために、自分にとって何が必要なのかということをも十分理解できるように育てることが学校としては大事なことだと思います。

○森本 ありがとうございます。

今、先生方のお話を伺っていて、まず棚田先生がおっしゃったように、子供をよく見る、見抜く力が教師には必要だというのは本当にその通りだと思いました。私の場合接するのは大学生ですけども、最近大学には本当に色々な背景を持った学生が来ます。何らかの障害を持った学生もいれば、育った環境や、留学生ではないけれども外国にルーツを持つといった学生が来ますので、そういった力は自分も高めないとはいけ

ないなと思います。単に言語の問題ではないのだなというのを感じました。

また、岡先生のお話を聞いて、確かに学生自身も自分が何を求めているのか、何が必要なかを伝える力がもし大学レベルまでに培われていたら、あとは我々大学側が、学生がそれを安心して伝えられるような環境をつくることが大事になるかと思いました。大学の話で申しわけないのですが、それまでにやはり学生がどのように育ってくるのかという、それは恐らくその大学だけの問題ではなくて、日本の学校教育の問題かなと思いました。

では、フロアのほうからもし何か御質問があれば承ります。いかがでしょうか。

○質問者1 本日はありがとうございました。

私は聴者ですが、日本手話と日本語対応手話の違いと言うのを今ここで実際に見てみたいと思いました。先程「高速道路では車間をとってください」というのを日本語対応手話でやっていただきましたが、それを日本手話で表現していただくことは可能でしょうか。

○棚田 日本語のラベルで言いますと、車間のところで/かたい(固い)/という表現をします。「車間がかたい(固い)」、これは日本語に直訳するとおかしいと思うんですが、/かためる/という手話単語があります。車と車の間に/かためる/という手話を入れて、これを日本語に訳すと「車間をとる」という意味になります。

○森本 ありがとうございます。

あともう一つぐらい質問を受け付けたいと思います。

○質問者2 本日はすばらしいお話を聞かせていただきありがとうございました。

二つ質問がございます。

一つは、昨年、あるろう学校の幼稚部の見学に行かせていただいたのですが、その時に実際に教育されてる状況を見てみると、先程棚田先生のお話にあったような日本手話で教えてる様子ではなく、/私/ /は/、/私/ /が/といったような助詞を指文字で加えたようなものでした。ああいった教育を続けていかれると、日本手話を使う生徒の数が減っていくのではないかと想像したのですが、実際、今、大宮ろう学園で日本手話を使っている生徒の数は減っているかどうか、どう感じていらっしゃるかということをお質問したいということが一つです。

もう一点は、明晴学園についてなのですが、私の近くのろうあ協会で活動されてる方からお伺いしたのですが、明晴学園を卒業されて、その後一般のろう学校にかわられ

た生徒さんが、日本手話を身につけてしまったばかりに一般のろう学校で使われている日本語対応手話になじめずに引きこもりになってしまったという事例があったというお話をお伺いしました。本当にそのようなことがあるのかどうか、実際現場をよく御理解なさっている、岡先生に回答をいただきたいなと思います。

○森本 ありがとうございます。

では、最初の質問は、棚田先生お願いします。

○棚田 大宮ろう学園に関して言いますと、幼稚部にろうの教員が2人いまして、子供たちと常にかかわっていますし、非常に関係を強く持っていますので、子供たちは日本手話を獲得していますね。学校全体でろうの教員は16人いまして、その他は聞こえる教員なのですが、ろうの子供たちは、相手によって自分の使う言語を変えたりしていて、非常に賢いなと思います。ただ、ろうの教員が少ない場合や、またこれからろう教員が減ってきた場合は日本手話を使うろう者もきっと減ってくるでしょう。

○岡 ありがとうございます。

絶対数のことを言うと、日本手話を使うろう者は確実に減っていると思います。それは一つには少子化が関係あります。子供の母数が減っているのです、その中の聞こえない子供の数も減っているということです。それと、人工内耳が普及しているのです、日本手話を使って暮らしている子供の数は圧倒的に少なくなっていると思います。もう今現在、私は、日本手話は危機言語化していると思っていますが、このままの状況でいけば日本手話が消滅する日が来るだろうと博士論文の時代から書いているので、日本手話は相当に危ない言語だと思っています。

引きこもりの生徒がいたかどうかは多分卒業してからのことなので、しっかり把握しているわけではないのですが、実は明晴学園にいる間にも引きこもりになる子はいます。これはどこの学校にもいる、どこの学校にもある事例だと思います。だから、卒業生の中に引きこもりになっている状態の子供がいたかもしれません。ただ、そのままになっている子供は多分いないと思うので、もう高校を卒業する年代になっているとか、もしかしたら、学校が合わなくて転校するという生徒もいるかもしれないし、でもそれは恐らく日本手話を先に身につけてしまったがために、周りのろう学校になじめないということが原因かどうかはよくわからないのと、我が校からは、一般校とろう学校と半々ぐらいの比率でずっと継続的に卒業生が出ておりますので、どちらのケースで合わないケースが出たのかもわからないところがあります。

○森本 では第二部はこれで終了させていただきます。皆様、どうもありがとうございます。先生方もどうもありがとうございました。

それでは、次、森田先生のワークショップ、第三部へ行きたいと思います。

【第三部】『手話言語に楽しく触れ合ってみましょう』

講師：森田 明氏（学校法人明晴学園教諭）

司会：松岡 克尚（関西学院大学人間福祉学部教授／手話言語研究センター研究員）

○松岡 皆様お待たせいたしました。今から第三部のワークショップを始めたいと思います。

第三部の司会を担当させていただきます関西学院大学手話言語研究センターの松岡と申します。どうぞよろしく申し上げます。

第三部の講師をしていただきます森田 明先生のご紹介をさせていただきます。

森田 明先生は、横浜市立ろう学校をご卒業になられて、その後、亜細亜大学にお進みになり、その間ウエスタン・ワシントン大学にも留学されています。そして、玉川大学の通信教育を経て、現在、学校法人明晴学園中学部の先生を務めていらっしゃいます。明晴学園では、小学部から中学部の手話科を担当されています。この手話科というのは、いわゆる国語に該当する科目だそうです。さらに、森田先生は手話ポエムや手話語り話者、そして数々の作品を発信していらっしゃいます。

今から森田先生にバトンタッチしますが、その前に二点ほど注意事項があります。

一つ目は、ワークショップが始まりましたら、一旦日本語をお休みしていただけたらと思います。つまり、音声は忘れて、音声のない世界をぜひ楽しんでいただけたらと思います。外国に行ったような気持ちで講座を受けてほしいという、森田先生からのメッセージをいただいています。

二つ目は、皆様荷物をお持ちだと思いますが、ペンとノートといったもの全てしまっただけ、完全に手ぶらで御参加いただけたらと思います。色々と動かなくてはならないと思いますので、そのつもりでご準備いただけたらと思います。

今から50分間を予定しておりますので、どうぞよろしく申し上げます。

それでは森田先生、お願いいたします。

（ワークショップ）

○森田 皆様、声を出していただいて結構です。皆様、疲れましたか。楽しかったですか。声を使わずに講義を受けるのは初めてではないですか。時間としては40分ぐらいだっ

たと思いますが、皆様に、いわゆるろう者の体験というのをさせていただきました。手話があるからコミュニケーションができるのです。手話がなければ、恐らくこういったコミュニケーションはできないと思います。

皆様にお聞きします。先程、手話で /違う/ /家/ /動物/ など、色々な言葉を覚えられたと思うのですが、これらを声を付けてあらわすことはできますか。恐らく手話が崩れたりすると思います。例えば、手話に声を付けて「犬ですか?」と言ってみてください。恐らく無理だと思います。

手話というのは、そもそも誰がつくったのでしょうか。逆に、日本語は誰がつくったのでしょうか。皆様御存知ですか。神様でしょうか。いえ、人間です。人が沢山集まればコミュニケーションが生まれ、やがてそれは確かなものとなっていきます。人間というのは言葉をつくる能力、言語を生み出す能力があります。複雑な文法構造などが備わっているので、手話も生まれたのです。手話というのは人がつくったのではなく人から生まれたのです。人工的につくられたものではないということです。ですので、複雑で深い話もできるということです。

次に、手話は身振りではありません。皆様に先程身振りをさせていただきましたが、実は手話はそこまで大きなリアクションや、動きというのは不要なのです。言葉と身振りは違います。身振りだけを使って深いコミュニケーションをとるとするのはとても難しいです。例えば、「虎」だけでしたら身振りでも伝わりますけれども、「人間となかなか友達になれない」、という虎の悩みなどは身振りだけであらわすのは難しいですよ。インシシの「いつも真っ直ぐにしか走ることができない。どうすればいいだろう」などという悩みは身振りでどうやってあらわしますか。そういった深いところまで掘り下げるのは難しいと思います。単語だけであれば何とか身振りで伝えることはできるかもしれませんが、長い文章になったり、悩みなどの深い議論になると身振りではできません。

あと、手話は世界共通ではありません。国によって違います。先程も言いましたように、やはり人が集まってコミュニケーションが生まれるので、会ったこともない国の人たちの手話が違うのは当たり前なのです。アメリカにはアメリカの、中国には中国の文化や生活習慣があります。世界の色んなところにそれぞれ違ったコミュニティーがあるのです。ですが、植民地等の歴史的会計や戦争などの影響で言葉が似通った地域も存在します。

先程もお話ししたように、日本手話は声を出しながら表現することはできません。この二つは違う言語だからです。声を出しながら手話をあらわすのは日本語対应手話です。手話サークルなど、場所によってそれは使い分けられているようですが、日本語対应手話ではなく、日本手話を身に付けてほしいと思います。ぜひ皆様、日本手話を母語とするネイティブサイナーと交流をし、人から自然に生まれた日本手話を身に付けてほしいと思います。

では、以上でまとめとさせていただきます。ありがとうございました。

○松岡 森田先生、ありがとうございました。参加者の皆様もお疲れさまでした。

ゲーム形式で、本当に音のない世界を楽しんでいただけたのではないかと思います。

閉会の辞

松岡 克尚（関西学院大学人間福祉学部教授／手話言語研究センター研究員）

○松岡 私から閉会の挨拶をさせていただきます。

本日は、長時間、本当にお疲れさまでした。一部から比べると、人数が減って寂しくなりましたが、多くの方にお越しいただくことができました。中国地方は大雪、兵庫県の間山部も雪が積もっているということで、来場いただけなかった人もいらっしゃるかもしれません。

それから、阪神電車のダイヤの乱れによって、来場いただけなかった方、遅れて来られた方もいらっしゃるかもしれません。気候・交通機関がこのような状況にもかかわらず、多くの方にお越しいただけたことに心からお礼申し上げます。

本日は、一部、二部、三部ということで三部構成と、忙しい内容ではありましたが、実は、東京で本日の二部と三部と同じような内容のイベントを開催したのですが、とても好評だったので、東京開催だけではもったいないということになりました。大阪でも同じ内容を是非、ということで登壇者の方々には東京の方もいらっしゃる中、無理をお願いしてお越しいただきました。全く同じプログラムではなく、大阪らしいことができないかなということで、かなり欲張って一部に映画を上映しました。

一部は、「聾者(ろう者)の音楽」を視覚的に表現したアート・ドキュメンタリー映画である「LISTEN リッスン」の上映、そしてその後の、「音のない音楽」など音楽の多様性についての対談を通して、その可能性について話ができただけではないかと思っています。

二部は、頭の体操ということになるかと思いますが、岡先生から言葉の覚え方に着目し、耳から言葉を覚えていくのと目から覚えていくのでは、自然発生的に言葉は違ってくるというお話をいただきました。

棚田先生からは、ろう学校の取り組みという貴重なお話や、日本語と日本語対応手話の違いについてお話いただきました。

そして三部、森田先生からは体を動かしながら手話の世界、いろはの「い」を学ぶことができたのではないかと思います。これをきっかけに、手話について興味関心を持っていただければと思います。

それぞれ盛り沢山過ぎて、統一したテーマが少し見えにくかったかもしれません。

色々な捉え方をできるかもしれませんが、実は今回の企画には次のような意図がありました。言葉というのはコミュニケーションの手段です。その言葉というのは、音声言語でコミュニケーションしても構わないし、手話言語を使ってコミュニケーションしても構わない。このようにコミュニケーションの多様性を私たちはこれから尊重していく必要があると思います。

それでは、音楽はどうかということですが、実は音楽を通してメッセージを伝えようとしています。それは作曲家とのメッセージのやりとり、対話になります。あるいは、演奏する人と聞く人との対話、あるいは自分で演奏して自分との対話をする、お風呂で鼻歌を歌って自分と対話する、ということで、やっぱり対話、コミュニケーションをしています。そこで音の対話があっても構わないと思うし、音がない対話があってもいいかもしれない。このような多様性があることを学んでほしいということ、そして本日の映画のタイトル「LISTEN リッスン」。これは聞く、傾聴という日本語にもなります。相手の言い分に耳を傾ける、相手に関心を持ち、何を伝えようとしているのか耳を傾ける。時には言葉、音でコミュニケーションをとってくる人もいるし、そうではない人もいるかもしれない。色々な人がいる中で、それでもお互い耳を傾けようという姿勢を私たちは持っていかなければいけない。listenできる社会をつくっていったら、多様性を受け入れることのできる寛容な方を育成できれば、というメッセージを込めたつもりです。

私たちのセンターは、これから手話言語ということの研究したり、情報発信したりする中で、先程申し上げたことをこれからもやっていきたいなと思っていますし、来年度も様々な取り組みをしていきたいと思っています。もし何か今後こんなことをやってほしい等の希望がもしもありましたら、この後、お手元にあるアンケートに書いていただければと思います。皆様からの意見を参考にして、もっと面白い取り組みをしていきたいと思っていますので、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

最後に、本日のイベント開催にあたっては、多くの方に支えていただいています。その方々にお礼を申し上げたいと思います。

まず一つは、本日ご来場いただいた皆様に、感謝申し上げます。本当にありがとうございました。これからもよろしくお願いいたします。

それから、情報補助ということで、とてもすばらしい手話通訳をしてくださいました4名の皆様、本当にありがとうございました。それから、要約筆記をしてくださった、

関西学院大学の学生4名の方。普段の授業から耳の聞こえない学生に対してサポートをしてくれています。とても素晴らしいスキルを持っていることを見ていただけたかと思います。ありがとうございました。

そして関西学院大学には日本手話サークル「はなまる」があります。本日はスタッフとして「はなまる」に所属している学生4名が準備や受付を担当してくださいました。ありがとうございました。

多くの方々に関わっていただいて本日の講話会を開催することができましたこと、改めて御礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

登壇者紹介

やまもと まさよ 山本 雅代 (関西学院大学国際学部教授／手話言語研究センター長)

まきはら えり 牧原 依里 (『LISTEN リッスン』共同監督)

こいし かつら 小石 かつら (京都大学白眉センター特定助教)

オストハイダ テーヤ

(関西学院大学法学部教授／手話言語研究センター研究員)

おか のりえ 岡 典栄 (学校法人明晴学園国際部長)

たなだ しげる 棚田 茂 (埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園主幹教諭)

もりもと いくよ 森本 郁代 (関西学院大学法学部教授／手話言語研究センター副長)

もりた あきら 森田 明 (学校法人明晴学園教諭)

まつおか かつひさ 松岡 克尚 (関西学院大学人間福祉学部教授／手話言語研究センター研究員)

□当報告書は、2017年2月11日に梅田センタービル ホワイトホールで開催された手話言語研究センター講話会の内容を再現したものである。

手話言語研究センター講話会

開催日時 2017年2月11日 11:00～16:30

開催場所 梅田センタービル ホワイトホール

主催 関西学院大学手話言語研究センター

手話言語研究センター講話会報告書

2017年3月27日発行

編集 関西学院大学手話言語研究センター

発行 関西学院大学手話言語研究センター

〒662-8501 西宮市上ヶ原一番町1-155

電話 0798-54-7013

FAX 0798-54-7014
